

文部科学省補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」

2022年度 連携型共同研究 成果報告書

研究課題名	工業地域の再生と「豊穰化の経済」－場所の記憶、ツーリズム、コミュニティ、エコシステム
研究代表者	小関 珠音（大阪公立大学大学院 都市経営研究科 准教授）
共同研究者	藤田 和史（和歌山大学 経済学部 准教授） 立見 淳哉（大阪公立大学 経営学研究科 教授）

研究成果

本年度は、コロナウィルス感染拡大の影響により、出張が制限されたため、フィールドワークは限定的となった。その状況下においても、研究代表者（小関）は、本学と大学間提携及び部局間提携（先方：経済経営研究科、当方：都市経営研究科）を締結しているパドバ大学 Silvia Rita Sedita 教授、フィレンツェ大学ラッゼレッティ教授等が実施してきた Rethinking Clusters 国際学会を大阪公立大学で開催し、盛況に終わった。研究発表内容は、大阪市立大学創造都市研究科修了生2名がかかわる有田市のイタリアンレストラン TestiMone の防災・観光拠点としての存在意義について発表を行った（Ozeki et, a, 2022）。その結果、Rethinking Clusters 2022 の学会発表を取りまとめる書籍の著書の一人として招聘され、同発表内容をもとにした論文を同書籍に掲載する（2023年初夏刊行予定）。また、Sedita 教授とともに徳島県上勝町を往訪し、今後の共同研究の基盤を構築した。循環型エコノミーは、同教授が重要な研究テーマとして掲げ、パドバ大学内に研究チームを発足しているもので、今後も交流を継続していく。引き続き、立見・藤田との研究交流を深め、共同研究を進化させる。

立見は、フィールドワークの制限のなかで、第一に、豊穰化の経済における価値づけの仕組みについて理論的検討を深めた（立見・山本, 2022）。コンヴァンション経済学の系譜の中で、いかにして「価値づけ」が主題化してきたのか、それによってコーディネーションから政治経済学までを含めた射程を有するに至った経緯と理論的到達点をまとめた。価値づけ研究に関してはフランスの創造産業を事例とした研究をこれまで行い、また構想しているが、ラグジュアリー産業・現代アート産業分野に造詣が深く、また得難い人的ネットワークを有する Jean-Marc LeGall 氏（もとパリ第4大学）を本研究資金も活用しながら招聘し、ディスカッションすることで最新の状況に関する知見を得るとともに、その協力支援のもと、今後の研究への準備を行った。

また、第二に、価値づけ研究からの地域再生を考察する上で重要な論点となる、価値の分配をめぐる問題をふくめて、社会連帯経済とその日本的文脈への応用を中心に考察し、これからの地域発展理論を展望した（立見, 2022）。この点に関しては、さらに、経済地理学にとっての重要概念であるロカリティという観点から再考し、既存研究との接続を行った（長尾謙吉・立見淳哉, 2022）。なお、上述の LeGall 氏からはフランス連帯経済の動向とその解釈についても有意義な知見を得ている。

また、これらの二つの研究を架橋するテーマとして、丹波篠山市における「観光まちづくり」に基づく地域活性化をさらに社会連帯経済を手掛かりに新しい地域経済の構築へと発展させる実践をアクション・リサーチ的に継続調査した。「観光まちづくり」は「豊穰化の経済」における価値づけの典型的事例であるといつてよいが、それをさらに、民主的ガバナンスの導入（企業の公共空間化）と価値の公正な分配を組み込むことで、オルタナティブな地域経済へと拡張させる試みである。

藤田は、産業集積地域において、地元工業高校が人材育成・起業人材排出に果たす役割について、最盛期の1/2にまで規模を縮小しつつある長野県諏訪地域を事例に調査・検討した。卒業名簿から諏訪地域の工業高校機械化卒業の生徒の進路を分析し、少数ながらも卒業時点において家業を承継し、集積の維持に一定の役割を果たす生徒があることを確認した。また、これらの卒業生が一定期間を経過した後に、起業・独立創業を果たすなど起業家として成長をしているのか、現在追跡調査を行っている。今年度は、昨年度に続き複数年

度の傾向を分析しており、同様の傾向があることを確認した。今年度は、他学科の傾向について比較検討を実施する予定であったが、現地調査によるデータ採取を継続している。

上記の検討を進める一方で、藤田は産業のエコシステムについて、風土産業の観点から、和歌山県内でのブドウハゼ実の栽培復活と利活用に関する検証を開始した。ブドウハゼ原木の再発見から、地域での栽培復活、普及のための産業化、そして地域内外の資源・アクターの結合による産業複合体の形成に関して、研究を進めている。昨年度は、先進地である福岡県みやま市で精蠟業を営む荒木精蠟所において、精蠟行を継続する上で必要となるハゼの供給について、生産者との関係や栽培普及の取組などについてヒアリング調査を行った。また、産業化のハブとなる精蠟の持続性に関する課題について教示を受けた。今年度は、伊予精蠟について愛媛県内での調査を予定しているほか、滋賀県長浜市で和蠟燭を生産している業者に対してエンドユーザーの側から、ハゼおよび蠟燭の産業化に関するヒアリング調査を予定している。なお、本研究にかかっては、藤田(2022)として、JST 資金および学内補助金を使用して研究を進めている。

堤英貴・小関珠音「アントレプレナー・エコシステム (EE) の形成に影響を与えるコンテキストに関するシステムティックレビュー」	2023	日本ベンチャー学会誌 No.41 (研究論文 (学術雑誌)・国内誌)
堤英貴、小関珠音「アントレプレナー・エコシステム (EE) 形成における構成要素の強化連鎖」	2022	日本ベンチャー学会 第25回全国大会 (於：駒沢大学) 2022年12月8日
仙波, 真二; 小関, 珠音「意味のイノベーションにおける批判精神のルーツに関する一考察」	2022	研究・イノベーション学会 第37回 年次学術大会 2022年10月29日
Tamane Ozeki, et. al. “Building local resilience capability: Reciprocal influence and relationship between local government, private companies, and citizens.”	2022	Rethinking Clusters 2022 International Conference Osaka Metropolitan University 主催 2022年9月5日
立見淳哉「第1章 新しい地域発展理論」小田切徳美編『新しい地域をつくるー持続的農村発展論ー』2022年2月、1-20頁 (単著)	2022	岩波書店
長尾謙吉、立見淳哉「持続可能な経済社会とローカリティ研究」	2022	『(創設70周年記念事業) 21世紀における持続可能な経済社会の創造に向けて』1巻、9-18頁
立見淳哉、山本泰三「価値と価値づけの理論的検討ーコンヴェンション経済学における展開ー」	2022	『季刊経済研究』40巻1~4号、48-66頁
立見淳哉「価値から価値づけへー「豊穡化の経済」と価値づけ形態ー」(特別セッションII「固有性の価値をどのように評価するかー文化と地域の視点から」)、文化経済学会大会(文教大学東京あだちキャンパス)(招待あり)	2022	文化経済学会(2022年7月2日)
藤田和史「木蠟・ハゼ実生産に関するおぼえがき」	2022	研究年報26号(和歌山高等商業学校創立100周年記念特集号)79-93頁